

特集 リトル・コミュニティの社会経済学

リトル・コミュニティの経済 — 沖縄の離島と自立 —

聞き手 山野 薫 (京都大学大学院農学研究科博士後期課程)

石原 修 (コープおきなわ理事長スタッフ)



石原 修さん

沖縄県の離島では、その環境ゆえに、独自性の強い経済・社会的問題を抱えている地域が多い。しかし、それぞれの島の理屈に合った仕組みをつくることができれば、経済的な自立にも成功している。離島が自立するために必要なことはなにか。商品開発を通して離島の活性化に携わってきた、コープおきなわ理事長スタッフの石原修さんに、リトル・コミュニティの経済というテーマでお話を伺った。

Q 現在、^{あぐにしま}粟国島の中学生たちとアイスクリームの商品開発を行っているそうですが、そのとりくみ内容を聞かせてください。

【石原】 これは県と粟国村のキャリア教育授業の一環で取り組んでいます。粟国島は塩ともちきびかりんとうが特産品なので、これらを上手に活かしてアイスクリームをつくりました。私が企画、開発、販売などに関する授業をしてから、中学生が実際に商品企画を行っています。中学生自らがメーカーに持ち込んで商談もして、「コク



図 1 沖縄諸島地図
出所：筆者作成

うまっ！AAアイス」という商品になりました。AAというのは「オール・アグニ」の頭文字です。10月23日にコープおきなわの3店舗で中学生が手売りしました。

Q座学と実践がセットになった授業ですね。授業ではどんなことを話されたのですか。

【石原】座学の授業では、商品開発全体の流れを説明します。お金を借りる、原価率を学ぶ、仕入れ計画と販売計画をつくる、販売計画では売り方も考える、売上が出たら借金を返済して、お世話になった人にはお礼をしよう。利益が出たら、その使い方をみんなで考えましょうといった具合です。実践の授業では、例えば企画書づくりでは、「誰に、どこで売なのか？どんな味にしたいのか？それを自分たちで考えて、決めてください」と中学生に話しました。メーカーとの商談では、商品の仕様やデザインについても、その場で自分たちの思いを伝えさせるわけです。販促経費についても「たとえば試食用のアイスクリームを用意するなら、スプーンも買わないといけない。凍ったまま持ち帰ってもらうためには、ドライアイスも付けて渡さないといけないよね」という話をしました。売価も自分たちで決めてもらいました。実際に20万円借りて、それを返済できる損益分岐点を算出してから売価を設定しています。製造個数とコープおきなわの店舗で販売する際の販促方法なども決めてもらいました。2個購入された方には30秒間の肩もみサービスをするなど、中学生ならではのアイデアも出されています。広報も島を挙げて取り組みました。村長、教育長と一緒に沖縄県知事を訪問し、完成したアイスクリームを食べていただいているシーンをテレビ局3



図2 県知事を訪問する粟国中学生
出所：沖縄タイムス HP より転載

局と地元の新聞2紙に大きく取り扱ってもらいました。

いざ店舗で販売してみると、郷友会や粟国関係者などがこぞって買いに来てくれたおかげで、製造した1,000個が2時間ほどで完売しました。

Qなぜこのようなキャリア教育を行うことになったのですか。

【石原】粟国村は、粟国島という離島にある、人口約800人の村です。県内の離島で、所得が1番目に低いのが伊い平へ屋や村で2番目に低いのが粟国村です。生活保護の受給率が高いので、一見収入があるように見えますが、働いて得た収入という点では粟国村がいちばん厳しいだろうと思います。

詳しくは後で説明しますが、「島では仕事がなくなっていく。だから、島から一度出た人はなかなか帰らない。」という状況があります。キャリア教育は、そこを何とかしたいとの思いから取り組んでいます。

粟国村のキャリア教育では、商品開発を通して仕事や働くとはどういうことかを学び、島で育ったことへの誇りを持ちましょう、ということが大事な目標です。加えて、経済の流れを知ることと、起業家マインド

を育てることも目的です。というのは、私はすでに 12 の市町村で同様の取り組みをしてきました。それらの経験を通して、「島に仕事がなくとも、仕事をつくりに帰るような人材を育成しないとだめだ」と感じていました。これまでに伊江島や南大東島などで行ってきた取りくみの主体は大人ばかりでしたが、粟国島では「みなさんが主体でやってみませんか。みなさんの意思でつくるんですよ」と言って中学生を取りくみの主体に据えました。

Q 離島には、離島ならではの深刻な問題がたくさんありますね。そんななかでも、石原さんは島を出る前の中学生が島への誇りを持つことが大事だと考え、どうやったらその誇りが形成されるかを考えられた。自分が育った島に誇りを持つというのは、多くの離島を抱える沖縄にとって非常に大切なことのように思います。

【石原】 沖縄の最大の課題は基地問題と離島問題です。県の「21 世紀ビジョン」でも、10 年計画の解決すべき課題の 1 番に基地問題、2 番目に離島問題を挙げています。離島問題といっても、中身は雇用、教育、医療の 3 つに分けられます。

たとえば伊平屋村は、12 年ほど前に 1,600 名弱だった人口が、いまでは 1,300 名近くまで減っています。伊平屋村の一般歳出は、以前は 46 億ほどあったのに、現在は半分以下の約 21 億です。そうすると建設業が衰退し、農業をやりながら建設業でも収入を得ていた若者が、島では暮らせなくなって島を離れた結果、高齢化と人口減少が進んでいます。

伊平屋村では財政的に一番悪い時には、

公債比率（村の収入に占める借入れの割合）が 29.8% を占めていました。ちなみに、以前話題になった夕張は 36% ぐらいだったと聞いています。こうなると島では閉塞感が生まれて、人材も不足し、チャレンジシップも欠如するので何もできなくなりました。今まではどちらかといえば、口を開けて待っていたら、公共工事などで国がお金を落としてくれていたけれども、今では国もお金を渡さなくなった、という状況です。

教育や医療に関する問題も深刻です。沖縄には 39 の有人離島がありますが、そのうち高校があるのは 4 島だけです。それ以外の島では、高校進学と同時に島を出て、家族と離れて生活せねばなりませんので、月に 10 万円ぐらいが生活費・教育費として必要になります。親にとっては本土の大学に行かせるのと同じぐらいの大きな負担です。医療も同じで、普通は出産で家を離れるのは 1 週間ぐらいですが、島の人には子供や母親の体調を考えて 1 カ月ぐらい島を離れます。病気やけがも症状次第では、救急ヘリで本島の病院へ搬送します。

このように、離島の生活には苦しい局面が多いわけで、当然、仕事があれば人口流出が進み、最終的に無人島化します。

いま尖閣諸島が大きな問題になっていますが、無人島化はまさに領土問題に直結し、いらぬ争いごとを産み出します。

こういう状況だから、県は基地問題と離島問題を大きな問題として挙げているわけです。

Q だからなおさら、中学生のうちに離島育ちであることをプラスに感じられるような経験をさせておきたいと。

【石原】 どのように使うのか、まだわからないけれども、そもそもこのアイスクリームではたぶん大した利益は出ないですよ。けれど、成功体験を味わってもらいたいから、教育委員会や村長に協力してもらって、アイスクリームを持って中学生たちが知事を訪問した様子を、テレビや新聞で報道してもらいました。さきほども言いましたが、はじめだけこちらが説明して、あとは本人たちに考え、決めてもらう。そんな授業を通して、1つめに栗国島で育ったことに誇りを持つ、2つめに経済の流れを勉強する（稼ぐことの大変さを知り、島を出る時には親や島の人への感謝の気持ちを持つ）、そして3つめに起業家マインドを育てる（仕事があるから島に帰るのではなく、仕事をつくりに島に帰る）。キャリア教育はこの3点に収斂するように組み立ててあります。

沖縄の離島の大半がそうですが、栗国村でも選挙のたびに島が2分されます。そのような状況だからこそ、まずは中学生に商品を作ってもらい、中学生が商品をつくっているのを、小学生が取材して新聞にする。できた新聞は島民に配布して、島の飛行場や港に貼りだします。子どもたちがつくった新聞はみんな読みますから、分裂しがちな島でも、タテとヨコの関係づくりができます。

栗国島以外でも、たとえ少ないお金でも、みんなで島の特産品で商品を生み出して、その売り上げを子どもたちのために使うと言えば、実際にその商品が売れるようになります。高校の無い離島では、15歳で島を旅立ちますので、それまでは島ぐるみで子供たちを育てます。そこには本島の私たちにも計り知れない、特別な思いがあるよ

うに感じます。だからこそ、「子どもたちのために」という旗が立てば島がひとつになります。さきほどの3点に加えてこういう仕掛けも考えながら、地域の経済を回していこうと考えました。

Q離島には離島なりの経済発展の仕方があるとお考えですね。

【石原】 いま島はどんな状況かというと、子どもたちに「島から出なさい。いい会社に勤めなさい。公務員になりなさい」という教育をしているわけです。これが、離島が発展しない大きな要因の一つだと考えています。元気な離島に共通するのは、自立していること。県からの補助金を当てにせず、自らで地域経済の歯車を廻し、人々の交流を盛んに行っている。

織田信長の楽市楽座の時代から、人々の交流があるところは栄える。離島でも交流があるところは元気です。それと、女性が元気。島には島の理屈があって、女性の議員は誕生しません。そのような環境でも女性が頑張っている離島は元気です。

Qこのような、住民全体で島を盛り立てていこうという発想はなにがきっかけで生まれてきたのですか。

【石原】 私はコープおきなわに入って28年ぐらいになりますが、若い頃はバイヤーの仕事をしていました。消費者が購入しやすいものを調達するのがバイヤーの仕事で、商品を安く仕入れるために、県内産ではだめだから国内産、国内産でだめだったら輸入物…というように考えます。でも、このような考え方は、ある意味で地域を疲弊さ

せているのです。あるとき、「それは違うのではないか。地域も一次産業も成り立つにはどうすればよいか。」と考えたら、発想がまったく違ってきたんです。みんながつながって富を分配する、分け合うという発想をしたら、ネットワークの考え方や仕事の仕方が違ってきたんです。今思うと、それが大きかったかもしれませんね。

離島に関しては、以前から私なりの問題意識を持っていて、「どうすれば疲弊した離島を元気にできるか」を考えていました。以前、琉球大学名誉教授で現沖縄県副知事の高良倉吉先生と一緒^{たからくろよし いぜな}に伊是名島へ行った時、先生が「誇りを創る」ということおっしゃいました。高良先生は琉球の歴史学者で首里城の復元にも尽力された方ですが、歴史的に見ても、誇りを持っていた時代はうまくいっているようなんですね。そこで「地域おこしは誇りづくりから始めよう」を実践するようになりました。

いつも私がやっているのは、とことん対象に向き合うことです。今でこそ 6 次産業化とか、ソーシャルビジネスとかいろいろ言われますけれど、リトル・コミュニティというのも誰かが勝手につくった言葉で、こういう理屈は後からくっついてきただけです。

私はコープおきなわの第 1 号店舗の最初の店長もやりましたが、その時ゼロから組み立てる経験をさせてもらっています。自分で学んで、つくっていく。たぶん、この部分がいまに生きています。ゼロからつくった経験があるから、いろいろな地域へ行っても、いろんな相談事をうけても、何か組み立てていける自信があるわけです。

Qでは、コープおきなわが地域おこしの中

に入っていくことでは、どのような効果が生まれましたか。

【石原】きっかけは障害者施設での事業や、定置網でとれた魚の商品化といった要請が寄せられたことでした。これらはコープおきなわの理念「ともに創る くらしと未来」にも合致するので、取り組みを始めました。

生協は第 3 次産業です。世の中の理屈では、どうしても第 3 次産業が強い部分があって、第 3 次産業が第 2 次産業を叩き、第 2 次産業が第 1 次産業を叩くというふうなことを、知らず知らずのうちにやっているのかもしれませんが。それは生協でも同じで、いつの間にか主従の関係ができてしまい、コープおきなわの PB 商品を作るにしても、提携相手が本音で話し合いをしているような気がしなかったんです。

ところが、こういう取り組みをして、地域からの要請にこたえていくようになってからは、提携相手が本音で話すようになりました。そうすると、「商談」と称した駆け引きの関係から、知恵を寄せ合って、新たな価値を生み出す関係に変化していきました。協同組合原則に基づいた対等・平等の関係が本当の意味で大事なんですね。

知産地笑^{いしみねでんじつ}—これは私の好きな言葉です。読谷村の石嶺傳實村長が常々使っておられる造語で、「みんなで知恵を寄せ集めて、価値あるものを生み出して、地元みんなが笑えるように」という意味です。ひとりで完結しようとする、どうしても他との関係性が薄くなりがちです。

私はある県の職員から、「生協は、何かあったら抗議文として文句を言いに来る。何かあったら、要請文としてお願いに来る。お願いと文句しかないのか。日頃から関係づくりをしておかないと、お願いと文句では人間関係はつukれないよ」と言われたこ

とがあります。その言葉は重く受け止めています。

伊江島では、地域との関係づくりができる商品を、ということで、行政や漁協や地域の人々と一緒に1年くらいかけて「イカスミじゅーしい」という商品をつくりました。その商品開発を通して、伊江島では獲ることも売ることも意識した、商品のトータル設計ができる人間が出てきました。私の仕事は、このような発想のできる人間を地元につくっていくことでもあります。そうすると、単に獲るだけの漁業から、販売もする漁業に変わってきました。販売網の整備が漁業の活性化に繋がっています。

販売はコープのみが行うとはじめから決めてしまうと、第1次産業では販売に対する意識がおろそかになる。そうではなくて、地元にも、つくったメーカーさんにも、売る努力をしてもらう。みんなで作ってみんなで営業をする。どこかに依存するとダメです。もたれかかられたら迷惑な話です。第1次産業も出荷するだけではなく、みずからも売るとというのがポイントです。そうすると意識が変わってきます。伊江島も昔は「売れないから、獲らない」だったけれども、いまは「獲ったものを活用する」というふうに変わってきました。

第1次、第2次、第3次産業が連携して、漁業・農業振興と地域価値の最大化を図ることがねらいです。これは、私が昨年委員とした参加した、沖縄県の6次産業化戦略会議の方針にも入れてもらいました。私がいちばんこだわったのは農漁業振興と地域価値の最大化です。行政にはそれをトータルで支援してもらいたいと考えています。

伊江島では「イカ墨じゅーしい」の開発をきっかけに、地域経済の歯車が廻り始め



イカ墨じゅーしい
出所：伊江漁業協同組合 HP より

ました。「イカ墨じゅーしい」は、今では国際通りの土産物屋の半分ぐらいで売っているはずですし、県内のスーパーでも売っていて、累計で40万パックも出荷しています。これまで捨てていた、そでイカのゲソ部分を活用することの経済効果は大きく、累計で2,000万円近くの利益を産み出しています。

それまで伊江島では、水揚げした魚はセリにしか出していませんでしたが、セリでは自分で値段を付けることができません。そこで、この商品開発で得たネットワークを活かして、漁協が値付けできる相手と取引をはじめました。つまり、商品をトータル設計したわけです。

伊江島漁協では、この取り組みの中心的役割を果たした人を次の組合長に据えました。組合長になった当時は32歳だったので日本一若い組合長の誕生でした。

実践というのは、本当にいろいろなエピソードを生んで、地域のなかで変革を起こします。そのことが大きなやりがいにもなっています。

協同組合は地域コミュニティへの貢献・関与が原則としてうたわれているわけですから、共益のみの考え方では限界がありま

す。公益も考え、双方のバランスを取りながら事業と運動をすすめることでネットワークも広がると思います。

障害者施設と商品開発に取り組んだ時は「障害者は、知的・身体・精神など、不自由な部分はあるけれども、できることもたくさんある。それを上手に組み合わせることで何かできるよね。」という話になって、せっけんを共同開発しました。油を攪拌する人、シールを張る人、パッケージのデザインをする人、力仕事を受け持つ人などみんなで作業を分担して商品づくりをしています。コープおきなわでは葬祭事業がありますので、香典返しとしてそのせっけんセットを取り扱ったところ、3,000 円だった作業者のみなさんの月給が 15,000 円まで増えました。福祉分野の B 型事業は就労支援だから、月給は 3,000 円ほどだったんです。そうすると、他の作業所からも「私たちにもできるから」と申し出があり、しめ縄、パン、ケーキと連携が広がっていきました。福祉関係の方からは、これまで、「水を与えるだけで、井戸の掘り方を教える人はいなかったが、自分で井戸が掘れるようになった」という評価をいただいています。このような取り組みでは、県の福祉課や産業政策課を巻き込んだり、コープおきなわのシンクタンクとチームを組むこともあります。まずやりたいことのイメージをつくって、それに必要な人を集めて、チームを組んで、何かにチャレンジする。どれもそういうやり方でやってきました。このやりかたが比較的結果を残しているわけです。

Q 離島だからといって、分業の一部分に特化する形で生き残ろうとするのではなく、むしろ経済全体を見渡して、そこに関わっていくんだという意識を入れて進める。そうすると、生産者側からいいモノ

をつくれるようになり、いいモノをつくれるようになると販売にもつながるといった好循環が生じる。これはイメージがまずあって、それを地域に合わせてアレンジする、というようにビジョンをつくっているのですか。

【石原】 理念ありきではありませんよ。あくまで相手の力量に合わせた仕掛けをつくります。だから、大きな仕掛けが必要なときは大きな仕掛けをするし、小さな仕掛けが必要なときは小さな仕掛けをする。それによって誰とチームを組むかも違ってくるとし、市場も違ってきますね。無理をしてもミスマッチが起きますから。そうではなくて、離島が自らの手で上手に歯車を回せるようなマッチングをして、チームをつくります。そうしないと島が疲弊してきます。子どもたちのキャリア教育についても、頭で理解できることと実践することは違いますから。私が大事にしているのは実践です。実践のなかから学びがあるし、実際、自分でやることによって、人それぞれの落とし込み方が違うから、それが後々にもものすごく生きてきます。理念を言葉面だけで語ってもつまらないですからね。実践がエピソードを生んで、そのエピソードが伝わることで組織の考え方、つまり理念を深化させることにつながっていると思います。